

宮古歌謡の歌形

著者	玉城 政美
雑誌名	沖縄文化研究
巻	8
ページ	289-376
発行年	1981-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015570

宮古歌謡の歌形

玉 城 政 美

一 はじめに

奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島には、いろいろに異なったジャンル名をもつ多くの歌謡が伝わっている。それらは、神々の讃美や神々への祈願などを謡った呪禱的歌謡をはじめとして、生産活動や社会生活のさまざまな局面に生起するできごとを対象にした歌謡、あるいは、男女の情愛を謡いこめた抒情的歌謡に至るまで、多様な内容を表現している。しかし、それらを表現形式の面からみると、奄美・沖縄諸島の琉歌など、一部のジャンルを除いて、ほとんどの歌謡が対句法を用いている、という大きな特徴がある。すなわち、内容的には、呪禱的歌謡から抒情的歌謡に至るまで多岐にわたるが、対句法という共通の表現形式によってつらぬかれている。とりわけ、宮古歌謡は、他の諸島の歌

謡に比較して、この特徴が著しくきわだっている。そこで、対句法のありかたに即して、宮古歌謡の歌形を分類してみた。

テキストは、外間守善・新里幸昭編『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』を用いた。また、参考としてあげたオモロと八重山歌謡は、外間守善・西郷信綱『おもろさうし』（日本思想大系18）および外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』を用いた。

二 対句と反復句

宮古歌謡は、言語による表現（＝歌詞）をある旋律にもとづいて謡う。すなわち、歌詞と旋律とでなっている。

歌詞は、ことがらの展開を、対句によって叙述する部分とそれに添えられるハヤシ（以下では一般化して反復句とよぶことにする）とでできている。両者のうち、歌詞の根幹となり、内容表現上重要な役割をはたすのは対句の部分である。対句でことがらの具体的な展開を叙述し、反復句はそれに添えられて補助的役割をはたす。反復句は、ときに添えられないこともある。対句だけでできている歌謡は数多いが、その逆に、反復句だけでできている例は、宮古歌謡に限っていえばまったくない。もちろん、反復句の有意味化がすみ、一首のモチーフを凝縮的に表現することはある。だが、そのばあいでも、対句は本来の役割を失ってはいず、対句と反復句がともにモチーフを表現する二重性としてある。

対句

対句は、意味的に類義ないしは反義で、形式的に同格の語句二つを並べて、(1)同一対象を異なる側面から表現したり、(2)異なる対象を共通の側面でむすびつけて表現したり、(3)異なる対象を差違性の側面でむすびつけてたがいの対照性を浮き彫りにしたりする。

① ゆーチキぬ みゆぶぎ(A)

ゆーていだぬ みゆぶぎ(A')

対句構成の単位となる語句AとA'をそれぞれ〈対句項〉とよぶ。例にあげた対句は、対句項AとA'の二項が対応してできている。第一項の「ゆーチキ(夜の月)」と第二項の「ゆーていだ(夜の太陽)」は、類義語によって同一対象「月」を表現している。AとA'は、全体として意味・形式の両面において同格をなしている。これが対句の基本的なかたちであり、このような対句をA・A'形式としておく。

② ゆーチキぬ(A)

ゆーていだぬ(A')

みゆぶぎ(a')

A・A'形式の第一項Aの下半分が消失してA・A'a形式ができる。この形式は、たがいに対応する項A・A'と対応する項がないa'の三対句項できている(a'は対応部分aを欠くが、特別に対句項とみなす。対句には、以上の二種類の形式がある)。

対句の型

歌詞が対句を用いて、連続進行的にことからの展開を叙述するのに対して、曲は比較的短い一定の旋律を何回か繰り返す。この旋律の一回づつを〈節^{せう}〉とよぶ（歌詞は、旋律によって一定の分量ごとに区切られるので、宮古歌謡は複数の節からなるのが一般的である。ただし、トーガニは一節だけからなる）。『おもろさうし』の「一」「又」記号や『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』収録歌謡の句頭に付されている一、二、三、……等の漢数字は、節のはじめを指示する節番号である。

対句 A A' 形式と A A' a' 形式は、旋律化（歌謡）の段階で、いくつかの型に分化して実在する。これらは、一節内における対句項の数やあるいはそれらによって構成される対句のありかた（単純化して言えば対句項の数）を指標にして分類する。まず、A A' 形式は、つぎの三種類に分化する。

I 型…一節内に対句項が一つある型 (A₁)。

上の屋マトウルギのタービヘカタフチウフナーの時

一 ういにやー まトロぎやよー (A)

二 ういにやー うやぶジやよー (A')

三 いびまがん やりば (B)

四 ピキまがん やりば (B')

(以下略)

対句は二節にわけて謡われ、一節内に対句項は一つだけある。このばあい、対句項A、A'、B、B'、…は、それぞれ同一旋律である。

Ⅱ型…一節内に対句項が二つある型(AA')。

上の屋マトウルギのタービ

一ういにや まとうるぎやよー(A)

ういにや うやふじやよー(A')

二いびまかんど う やりば(B)

ピキまかんど う やりば(B')

(以下略)

一節内に対句項が二つあって対句を構成する。対句項AとA'およびBとB'は、たがいに旋律が異なり、対句A、A'の全体と対句B、B'の全体とが同一旋律である。

Ⅲ型…一節内に対句項が四つある型(AA'BB')。

正月のエーグ

一正月ぬわーちゃりやよ(A)

みる年^{とし}のわーちゃりやよ(A')

あばす^むでるしやくと思^むうよ(B)

羽むゆるしゃくど思うよ(B')

(以下略)

一節内に四対句項(Ⅱ二対句)が並び、ちょうどⅡ型が二つあるかたちをなす。ただし、この二対句は、たがいに対関係をもたない。対句A、A'と対句B、B'をあわせた全体とつぎにつづく対句C、C'と対句D、D'をあわせた全体とが同一旋律である。

つぎに、A、A'形式は、つぎの二種類に分化する。

Ⅳ型：一節内に対句項が三つある型(AA'a')。

大城元のピャーシ

一にだでいぬシ(A)

ぱジみぬシ(A')

なやぎやーえ(a')

二うふかんむ(B)

やぐみゆーいゆ(B')

なやぎやーえ(b')

(以下略)

対句A、A'の全体と対句B、B'の全体とが同一旋律である。

V型…一節内に対句項が六つある型(AA'a/BB'b')。

志立^{しだていむとう}元のピヤーン

一にだでいぬシ(A)

はジみぬシ(A')

なやぎよー(a')

オポかんモ(B)

やぐみゆい(B')

なやぎよー(b')

(以下略)

一節内にIV型がちょうど二つ並んだかたちをなす。ただし、両者がたがいに対関係をもたないことはIII型のばあいとおなじである。対句A,A'a'と対句B,B'b'をあわせた全体とつぎにつづく対句C,C'c'と対句D,D'd'をあわせた全体とが同一旋律である。

つぎに、A,A'形式とA,A'a'形式とが一節内で複合して、つぎの一種類が分化する。

VI型…一節内に対句項が五つある型(AA'BB'b')。

いやり節(節歌4)

一おら頼ま 南風(A)

こといつけ こひるけい (A')

大いしやけ (B)

あるじ島 (B')

吹とふし (b')

二親たうらに しされて (C)

しゆたうらに しされて (C')

拌むぶしや (D)

おらけらしや (D')

有通し (d')

(以下略)

一節内で前半Ⅱ型、後半Ⅳ型の順に並んで複合した型。対句 A, A' と対句 B, B' をあわせた全体と対句 C, C' と対句 D, D' をあわせた全体とが同一旋律である。

一部のトーガニは、この型に属するが、典型的な例を八重山歌謡で示した。

A, A' 形式からはつぎの種類も分化する。

Ⅶ型：一節内に対句項が半分ある型 (A_{1/2})。

オモロ 卷六—三三二

又神座 <small>かぐら</small> の競 <small>けわ</small> い	又鳴響 <small>とよ</small> む君 <small>きみ</small> 加那志 <small>がなし</small>	又おぼつ <small>お</small> の競 <small>けわ</small> い	又聞 <small>きこ</small> ゑ鬼 <small>おに</small> ぐすく	又銅 <small>あかがね</small> 添 <small>そ</small> へ鰐 <small>つば</small>	又鳴響 <small>とよ</small> む鬼 <small>おに</small> ぐすく	又白金玉 <small>しろがねたまき</small> 纏 <small>まと</small> や
撓 <small>しな</small> い やちよこ	降 <small>お</small> れて 鳴響 <small>とよ</small> ま	撓 <small>しな</small> い やちよこ	又聞 <small>きこ</small> ゑ鬼 <small>おに</small> ぐすく	又銅 <small>あかがね</small> 添 <small>そ</small> へ鰐 <small>つば</small>	又鳴響 <small>とよ</small> む鬼 <small>おに</small> ぐすく	又白金玉 <small>しろがねたまき</small> 纏 <small>まと</small> や
(A ₂)	(A ₁)	(A ₁)	(B ₁)	(B ₂)	(B ₁)	(B ₂)

(以下略)

一節内に対句項が半分あり、四節で一对句を構成している。このばあい、対句項の半分 A₁、A₂、A₁、A₂、B₁、B₂、B₁、B₂、……は、それぞれ同一旋律である。

この型は、宮古歌謡には見当たらないので、オモロで示した。

反復句

反復句は、対句項の前・中・後に添えられ、各節において規則的に繰り返される。反復句の内容は、単なる掛け声的なものから一首のモチーフを凝縮したものまで多様にあるが、一括して反復句とよぶ。反復句の種類は、一節内における反復句の数とそれが占める位置によって分類する。反復句は、対句項の前後のほかに、中にも位置することがあるので、対句項 A、A'、B、B'、a、a'、b、b'などを A₁、A₂、A'₁、A'₂、B₁、B₂、B'₁、B'₂、a₁、a₂、b₁、b₂ に二分して、位置番号をきめる。対句の型 I ～ VII に即して示すと、つぎのようになる。

I 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃

II 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃ A'₁ R₄ A'₂ R₅

III 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃ A'₁ R₄ A'₂ R₅ B₁ R₆ B₂ R₇ B'₁ R₈ B'₂ R₉

IV 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃ A'₁ R₄ A'₂ R₅ a'₁ R₆ a'₂ R₇

V 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃ A'₁ R₄ A'₂ R₅ a'₁ R₆ a'₂ R₇ B₁ R₈ B₂ R₉ B'₁ R₁₀ B'₂ R₁₁ b'₁ R₁₂ b'₂ R₁₃

VI 型…R₁ A₁ R₂ A₂ R₃ A'₁ R₄ A'₂ R₅ B₁ R₆ B₂ R₇ B'₁ R₈ B'₂ R₉ b'₁ R₁₀ b'₂ R₁₁

VII 型…R₁ A₁ R₂

三 歌形の分類

歌形は、対句の型Ⅰ～Ⅶと反復句の種類（数と位置）を組合わせて分類する。分類に際しての序列は、対句の型をまず優先し、反復句の種類はそれに準ずる。

右の基準で分類すると、宮古歌謡の歌形は、大きく〈単一型〉〈混合型〉〈特殊反復型〉〈接合型〉〈特殊型〉に分類でき、それらはさらに下位分類することができる。

単一型

一首全体が等質的構造の節でできている型を単一型という。単一型は、対句の型Ⅰ～Ⅶに分類し、反復句の数と位置でさらに下位分類する（理論的に想定できる歌形については、拙稿「オモロの歌形」『琉球大学法文学部紀要』第二五号所収の「歌形分類表（単一型）」を参照）。

Ⅰ型…一節内に対句項が一つある型。

(1) 反復句が0のばあいには、つぎの一種類がある。

① 1-0-R₀(A)₁……対句項だけでできている型。

上の屋^{うゑ}マトウルギのタービへカタフチウフナーの時（タービ16）

一　ういにゃー　まトロギやよー（A）　　上の屋〈屋号〉のマトウルギ〈神名〉はよ

二　ういにゃー　うやぶジやよー（A'）　　上の屋の親大按司はよ

三　いびまがん　やりば（B）　　威部間の神であるから

四　ピキまがん　やりば（B'）　　区域の神であるから

- | | | | | |
|----|-------|------|------|-----------|
| 五 | んまぬかん | みゆぶぎ | (C) | 母の神のお蔭で |
| 六 | やぐみかん | みゆぶぎ | (C') | 恐れ多い神のお蔭で |
| 七 | ゆらさまイ | みゆぶぎ | (D) | 許されるお蔭で |
| 八 | ぶがさまイ | みゆぶぎ | (D') | 満たされるお蔭で |
| 九 | ばーにふチ | オこい | (E) | わが根口のお声で |
| 一〇 | かんむだま | まこいよ | (E') | 神の真玉の真声で |

(以下略)

(2) 反復句が1のばあいには、つぎの二種類がある。

① I-I-R₁(RA)₁……対句項Aの前に反復句が位置する型。

マイニャ元^{むとう}の夏穂^{なつぼ}祭りのピヤーシへ女^メ (ピヤーシ6)

- | | | | | |
|---|-------------|--------|------|--------------------------|
| 一 | あーじらへ囃子、以下略 | (R) | | |
| | このいびま | びゆりーイ | (A) | この威部間に坐 [*] します |
| 二 | このピキま | びゆりーイ | (A') | この区域に坐します |
| 三 | いびま | うふかんま | (B) | 威部間の大神は |
| 四 | ピキま | うふかんま | (B') | 区域の大神は |
| 五 | かんま | うふがらまい | (C) | 神は偉大であられるから |

- 六ピキま うふがらまい (C)
 七きゅーびゅーい ういや (D)
 八きゅーなおい ういや (D)
 九うふむとうが ういん (E)
 一〇にーむとうが ういん (E)

(以下略)

② I-I-R₃(AR)……対句項Aの後に反復句が位置する型。

大陰囊殿は (タービ 18)

一 うふふぎどうんま (A)

やぎやー 噓子、以下略 (R)

二 かみふぎどうんま (A)

三 かにやー うふちかさ (B)

四 とよん うふちかさ (B)

五 かんぬばな やりば (C)

六 ういぬばな やりば (C)

七 ヅあー ざー ういから (D)

区域(神)は偉大であられるから

今日の日取りの上は

今日の直る日の上は

大元の上に

根元の上に

大陰囊殿は

神の陰囊殿は

カニャーの大司は

鳴響む大司は

神の花へ神の中の神へであるから

上の花へ最高神へであるから

あなたの座の上から

八 あさき ざー ういから (D')

あなたの座の上から

九 たばかりゆー うきでい (E)

旅嘉例を受けて

一〇 うきかりゆー うきでい (E')

浮き嘉例へ船旅の安全を保証されて

(以下略)

(3) 反復句が2のばあいには、つぎの一種類がある。

① I-2-R_{1,3}(RAR_{1,3})……対句項Aの前と後に反復句が位置する型。

根の世勝りのタービ (タービ 25)

一 あーへ囉子、以下略 (R¹)

にゆぬ ゆまさイっざ (A)

根の世勝りへ神名へは

やーきやーへ囉子、以下略 (R²)

二 とうゆん ゆまさイっざ (A')

鳴響む世勝りは

三 ういかぬシ かんみよ (B)

上へ最高への主の神よ

四 くらいぬシ かんみよ (B')

位へ最高への主の神よ

五 きゅーびゆい ういや (C)

今日の日取りの上を

六 きゅーなオイ ういや (C')

今日の直る日の上を

七 んまぬかん みゆぶぎ (D)

母の神のお蔭で

ハやぐみかん みゆぶぎ(D')

恐れ多い神のお蔭で

九ゆらさまイ みゆぶぎ(E)

許されるお蔭で

一〇ぶがさまイ みゆぶぎ(E')

満たされるお蔭で

(以下略)

(4) 反復句が3のばあいには実例がない。

II型：一節内に対句項が二つある型。

(1) 反復句が0のばあいは、つぎの一種類がある。

① II-0-R₀(AA')……対句項だけでできている型。

タービの根口声(にうち) (タービ1)

一 ていんだうぬ みゆぶぎ(A)

天道のお蔭で

やぐみよーぬ みゆぶぎ(A')

恐れ多い神のお蔭で

二 あさていだぬ みゆぶぎ(B)

父太陽あさてだのお蔭で

うやていだぬ みゆぶぎ(B')

親太陽のお蔭で

三 ゆーチキぬ みゆぶぎ(C)

夜の月のお蔭で

ゆーていだぬ みゆぶぎ(C')

夜の太陽へ月のお蔭で

四にだりぬシ わんな (D)

根立て主のわたしは

やぐみ うふかんま (D')

恐れ多い大神は

五ゆーむとうぬ かんま (E)

四元むとうの神は

ゆーにびぬ かんま (E')

四威部の神は

(以下略)

(2) 反復句が1のばあいには、つぎの二種類がある。

① H-I-R₃(ARA') : ... 対句項AとA'との間に反復句が位置する型。

祓はらい声こゑ (タービ2)

一やふあだりる むむかん (A)

穏やかな百神

はらい はらい へ囃子、以下略 (R)

なごだりる ゆなオさ (A')

和やかな世直さ へ大皿の名

二ていんだオノ みオぶぎ (B)

天道のお蔭で

やぐみゆーいノ みオぶぎ (B')

恐れ多い神のお蔭で

三あさていだノ みオぶぎ (C)

父太陽あさてだのお蔭で

うやていだノ みオぶぎ (C')

親太陽のお蔭で

四ゆーチキ みうぶぎ (D)

夜の月のお蔭で

ゆーていだノ みうふぎ(D')

夜の太陽〈月〉のお蔭で

五にだりノシ わんな(E)

根立て主のわたしは

やぐみかん わんな(E')

恐れ多い神のわたしは

(以下略)

②II-1-R₅(AA'R₅)……対句項A'の後に反復句が位置する型。

バシクイのバソ(タービ20)

一チかきかん わんな(A)

司神〈神女〉であるわたしは

まっちやかん わんな(A')

祭りの神であるわたしは

ふーしー ふーしー〈囃子、以下略〉(R)

二ふらがんどう やりば(B)

子供の神であるから

またがんどう やりば(B')

子孫の神であるから

三んまぬかん みゆふぎ(C)

母の神のお蔭で

やぐみかん みゆふぎ(C')

恐れ多い神のお蔭で

四ゆらさまイ みゆふぎ(D)

許されるお蔭で

ぶがさまイ みゆふぎ(D')

満たされるお蔭で

五ばー にふチ オこい(E)

わが根口のお声で

かんむだま まこい (E')

神の真玉の真声で

(以下略)

(3) 反復句が2のばあいには、つぎの三種類がある。

① II-2-R_{1.3}(PARA')……対句項Aの前と後に反復句が位置する型。

佐良浜^{さらはま}のはいま (アーグ 80)

一 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

さらばまぬはいま (A)

佐良浜^{さらはま}のはいま 〈蟹〉

かなシようお願い (R²)

かなしよ

うりんちぬ みだかよ (A')

下の坂の目高よ

二 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

シたぬやー ういぬやーありうとうい (B)

下の家 上の家があつて

かなシようお願い (R²)

かなしよ

ピキすんな シむぬや (B')

引き潮には下の家

三 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

あぎすーんな ういぬやー (C)

上げ潮には上の家

かなシようお願い (R²)

かなしよ

あーぎぬやーん うぐなーり (C')

上の家に集まって

四 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

うとうざじゃーな うぐなーり (D)

親類だけ集まって

かなシようお願い (R²)

かなしよ

かたいじゃーな ゆらまい (D')

親類だけが寄り集まって

五 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

ゆがたりばなシぬ いでいうイすが (E)

世語り話が出ているよ

かなシようお願い (R²)

かなしよ

いびがんどんまどう すでいどうイチあ (E') エビがぞ生まれているよ

六 はいゆぬかなシ (R¹)

これこれかなし

ばやきやが すでいんちゃ にゃーんよ (F) わたしらと同じ蟹が生まれないとはどういうこと

だ

かなシようお願い (R²)

かなしよ

どうだが すでいんちゃ にゃーんよ (F') 自分と似た蟹が生まれないとはどうしたことだ

② II-2-R₂.4(A₁RA₂A₁RA₂)……対句項Aの中とA'の中に反復句が位置する型。

神憑りのアーク (アーク5)

一 ていだ (A₁)

よい〈囃子、以下略〉 (R¹)

がなシどーねー (A₂)

うシ ばい (A₁)

よい〈囃子、以下略〉 (R²)

やぐみどーねー (A₂)

二 きよび (B₁)

よーいんな (B₂)

かぎび (B₁)

ひかじんなねー (B₂)

三 やぐみていだ (C₁)

なやぎょーそーねー (C₂)

うぶやぐみ (C₁)

たかびよそーねー (C₂)

四 ただのボン (D₁)

とうらんまーねー (D₂)

太陽^{てだ}

加那志ぞ

添い栄え

神ぞ

今日の

吉日に

美しい日の

日数に

恐れ多い太陽^{てだ}を

名を揚げよう

大神を

崇べよう

(お供えの)分はただには

取らない

びチオさぎ (D₁)

別のお捧げを

トボンまねー (D₂)

(ただには) 取らない

五 んきやどうゆみゃ (E₁)

昔鳴響み親の

にだていオチねー (E₂)

根立ておいた

シたていオチ (E₁)

孵立ておいた

にがたみょーねー (E₂)

願い鎮めよ

(以下略)

③ Π-2-R_{3.5}(ARA'R)₁……対句項Aの後とA'の後に反復句が位置する型。

ヤーキヤー声^{ぐい}〈夏祭り〉(タービ3)

一 ていんだオの みゅーぶぎ (A)

天道のお蔭で

やーきやー〈囃子、以下略〉(R₁)

やぐみゅーいぬ みゅーぶぎ (A')

恐れ多い神のお蔭で

やーきやー〈囃子、以下略〉(R₂)

二 あさていだぬ みゅーぶぎ (B)

父太陽^{あさてだ}のお蔭で

うやていだぬ みゅーぶぎ (B')

親太陽のお蔭で

三 ゆーチキぬ みゅーぶぎ (C)

夜の月のお蔭で

ゆーていだぬ みゆーぶぎ (C)

四にだりぬシ わんな (D)

やぐみ うふかんま (D')

五ゆーむとうぬ かんみょー (E)

ゆーにびぬ かんみょー (E')

(以下略)

(4) 反復句が3ゝ5のばあいは実例がない。

夜の太陽へ月へのお蔭で

根立て主のわたしは

恐れ多い大神は

四元むぎの神は

四威部いべの神は

Ⅲ型：一節内に対句項が四つある型。

(1) 反復句が0のばあいは、つぎの一種類がある。

① H-O-R₀(AA'BB')……対句項だけでできている型。

正月のエーグ (アーク 37)

一 正月ぬわーちやりやよ (A)

みる年としのわーちやりやよ (A')

あばすでるしやくむと思うよ (B)

羽はむゆるしやくばと思うよ (B')

正月がやってくると

新年がやってくると

わたしは瞬はなでるへ若返るへへように思うよ

羽が生えるように思うよ

二 いで石だきばが親よ (C)

島となぎばが母よ (C')

うるずんぬとーがねーし (D)

若夏ぬゆぶがねーし (D')

* 若がえりわーらだよ (E)

すでかえりわーらだよ (E')

三七しゆつやわーちゃむぬ (F)

八しゆつやわーちゃむぬ (F')

四七しゆつや道なかよ (G)

八しゆつやべるなかよ (G')

島とまりわーりばが親よ (H)

ふんとまりわーりばが母よ (H')

(注) 節番号「三」は、*印の位置に付すべきか？

(2) 反復句が1のばあいには、つぎの一種類がある。

① III-1-R₉(AA'BB'R)₉……対句項B'の後に反復句が位置する型。

あがシ七嶺 (アーグ 84)

(地表に) 出た岩のようにわが父よ

島のある限りわが母よ

うりずん〈春〉のタウ木〈木の名〉のように

若夏のユブ木〈タウ木のこと〉のように

若返っておわしませ

解で変わって〈生まれ変わって〉おわしませ

七十歳は越してしまつたよ

八十歳は過ぎてしまつたよ

七十歳はまだ道中よ

八十歳は畑中よ (まだ途中で)

島とともに (いつまでも) おわせわが父よ

国〈村〉とともに (いつまでも) おわせわが母よ

一とうかゆうかぬ(A)

じゅうぐにちぬ(A')

あがいかぎ(B)

ぬういかぎ(B')

うちきだき ばんがうや(R)

二まんみんな(C)

まちじんな(C')

てらしかぎ(D)

くまどうくろ(D')

うちきだき ばんがうや(R)

三ていらしかぎ(E)

ゆどうしかぎ(E')

みやぎぶシ(F)

うがむぶシ(F')

うちきだき ばんがうや(R)

(3) 反復句が2ゝ9のばあいは実例がない。

十日四日の

十五日の

美しく上がり

美しく昇る

月のようなわが親

真胸に

真頂に

美しく照らす

この所よ

月のようなわが親

美しく照らす

美しくゆどうシへ未詳

見上げたい

拝みたい

月のようなわが親

IV型：一節内に対句項が三つある型。

(1) 反復句が0のばあいには、つぎの一種類がある。

① IV-0-R₀(AA'a)₁……対句項だけでできている型。

大城元うぶぐもとのピヤーシうぶぐもと〈男〉(ピヤーシ1)

一にだでいぬシ(A)

根立て主を

はジみぬシ(A')

始め主を

なやぎヤーえ(a')

崇べよう〈名を揚げよう〉

二うふかんむ(B)

大神を

やぐみゆーいゆ(B')

恐れ多い神を

なやぎヤーえ(b')

崇べよう

三ていんがなシ(C)

天加那志を

ういかなシ(C')

上加那志を

なやぎヤーえ(c')

崇べよう

四うぶゆーぬシ(D)

大世主を

ていだゆーぬシ(D')

太陽世主を

なやぎヤーえ(d')

崇べよう

五きゅーぬびゅーイ(E)

今日の吉き日を

くがにびゅーイ(E')

黄金の日へ吉日へを

とらまイ(e')

とられて

(以下略)

(2) 反復句が1のばあいには、つぎの一種類がある。

① IV-1-R₂(AA'aR)₂……対句項a'の後に反復句が位置する型。

ういぐすくかんどぬニイリ(ニーリ13)

(イ) フダヤーの歌詞

一 ういぐすく(A)

上城

かんどぬが(A')

金殿へ農業神への

生まりやよ(a')

生まれは

シュラマシヤリ ウヤヨへ囃子、以下略(R)

二 まいふがば(B)

賢い者として

しゅがれば(B')

働き者として

生まりちゅい(b')

生まれていて

三 びふがなな(C)

男子を七人

みどむなな(C')

女子を七人

生らしい(c')

生んで

四 ななぬふあぬ(D)

七人の子の

とゆたりが(D')

十四人の

親やれー(d')

親だったので

五 ななぬふあぬ(E)

七人の子の

とゆたりが(E')

十四人の

むちやぎや(e')

持ち上げは

(以下略)

(3) 反復句が2〜7のばあいには実例がない。

V型…一節内に対句項が六つある型。

(1) 反復句が0のばあいは、つぎの一種類がある。

① V-0-R₀(AA'a/BB'b')……対句項だけでできている型。

志立^{しだて}元^{いもと}のピヤ^{ピヤ}ーシ^{ーシ}〈男〉(ピヤ^{ピヤ}ーシ2)

一 にだでいぬシ(A)

根立て主を

ば^バジ^ジみ^ミぬ^ヌシ^シ (A)
 な^ナや^ヤぎ^ギよ^ヨー^ー (a)
 オ^オポ^ポか^カん^ンモ^モ (B)
 や^ヤぐ^グみ^ミゆ^ユい^イ (B')
 な^ナや^ヤぎ^ギよ^ヨー^ー (b)
 ニ^ニき^キゆ^ユぬ^ヌび^ビゆ^ユー^ーイ^イ (C)
 く^クが^ガに^ニび^ビゆ^ユー^ーイ^イ (C')
 と^トう^ウら^ラま^マい^イ (c)
 チ^チキ^キノ^ノび^ビヨ^ヨー^ーイ^イ (D)
 ま^マに^ニぬ^ヌび^ビヨ^ヨー^ーイ^イ (D')
 と^トう^ウら^ラま^マい^イ (d)
 三^三コ^コノ^ノト^トコ^コロ^ロ (E)
 コ^コノ^ノふ^フだ^ダみ^ミ (E')
 と^トう^ウら^ラま^マい^イ (e)
 ト^トコ^コロ^ロノ^ノシ^シ (F)
 ふ^フだ^ダみ^ミか^カん^ン (F')

始^{ハジ}め^メ主^{ヌシ}を
 崇^{タカ}べ^ベよ^ヨう
 大^{オホ}神^{カミ}を
 恐^{オソ}れ^レ多^タい^イ神^{カミ}を
 崇^{タカ}べ^ベよ^ヨう
 今^{イマ}日^{ニチ}の^ノ吉^{キチ}き^キ日^{ニチ}を
 黄^{オウ}金^{ゴン}の^ノ日^{ニチ}へ^ヘ吉^{キチ}日^{ニチ}を
 と^トら^ラれ^レて
 月^{ツキ}の^ノ日^{ニチ}を
 豆^{マメ}の^ノ日^{ニチ}を
 と^トら^ラれ^レて
 こ^コの^ノ所^{コロ}を
 こ^コの^ノ踏^フ鎮^{ヂン}め^メへ^ヘ区^ク域^{イク}を
 と^トら^ラれ^レて
 所^{コロ}の^ノ主^{ヌシ}を
 踏^フ鎮^{ヂン}め^メ神^{カミ}を

なやーぎよー (f')

崇べて

(以下略)

(2) 反復句が1ゝ13のばあいには実例がない。

VI型…一節内に対句項が五つある型。

(1) 反復句が0のばあいには、つぎの一種類がある。

① VI-0-R₀(AA'BB'b';)……対句項だけでできている型。

トーガニ1

とうかゆーかぬ チくるだきよー (A)

十日四日へ十四日ゝの月のように

じゅーぐにチぬ チくるだきよー (A')

十五日の月のように

あがイかぎ (B)

きれいに上がる

ぬゆイかぎ (B')

美しく昇る

くまどうくるよー (b')

この家庭よ

(2) 反復句が1ゝ11のばあいには実例がない。

VII型…一節内に対句項が半分ある型。

(1) 反復句は0、1、2まで占めることが可能だが、すべて実例がない。

混合型

単一型は、対句、反復句が各節とも等質的構造である。それに対して、混合型は、反復句は各節とも同一であるが、対句の型が節によって異なる非等質的構造である。この型は、二種類ないしは三種類の対句の型が混合してできている。

① I-0-R₀+II-0-R₀

越城^{くぐりくみ}目差親^{めざしうや} (クイチャー21)

一 コいゴシく めざしうや (A)

ゆぶしゃいが うみさとうよ (A')

二 いわらにが にわらん (B)

ゆぶしゃにが まぴゃんよ (B')

三 きくぬはなよ いびわーしよ (C)

さきよろはな さしわーしよ (C')

(中略)

一ハ うぬうざきやよ うざきや」

越城^{くぐりくみ}へ地名^{めいめい}の目差親

ユブシャニ^{ユブシャニ}へ人名^{めいめい}の思里よ

ニワラニ^{ニワラニ}へ女の名^{めいめい}の庭に

ユブシャニの庭に

菊の花を植えて

咲く花をさして

このお酒はお酒は

ぬみゃみょん うざきろ (D)

飲んでみないお酒だ

一九 うぬまざきや まざきや (D')

この真酒は真酒は

ぬみゃーみょん まざきろ (D')

飲んでみない真酒だ

二〇 たばこ ふき さとのシ (E)

煙草をすいなさい 里之子

きぶしゃ ゆび うみさとう (E')

煙草をすいなさい 思里

二一 うぬたばこよ たばくや (F)

この煙草は煙草は

ふきゃーみょん たばころ (F)

すったことがない煙草だ

三二 うぬきぶしゃ きぶしゃやよ (F')

この煙草は煙草は

ゆびゃーみょん きぶしゃろ (F')

すったことがない煙草だ

(以下略)

第一八節と第一九節、第二一節と第二二節は、一節内に対句項が一つあり(そして、たがいに対句を構成している)、反復句がないので I-O-R₀、他は省略部分をふくめて、すべて一節内に対句項が二つあり、反復句がないので II-O-R₀である。したがって、I-O-R₀と II-O-R₀の混合型。なお、第一八節と第一九節の歌詞を、仮に、

一八 うぬうざきやよ うざきや

うぬまざきや まざきや

一 ぬみやみよん うざきろ

ぬみやーみよん まざきろ

と入れ替えたならば、I型になる。第二一節と第二二節も同様にすれば、全体が整然としたI-O-R₀になる。

② I-I-R₁+II-I-R₁

東里^{あがいざと}マーシ (アーク3)

一 ぞーよー ぞーよー ハー〈囃子、以下略〉(R)

あがイざト まーしが (A)

やーざトノ まーしが (A')

二 ゆかいむぬ やりょトリ (B)

いんシむぬ やりょトリ (B')

三 いちぬばーや なしよトリ (C)

ななぬばーや なしよトリ (C')

(中略)

六 なちぬゆーぬ なぎんな

ばらううざぎ とうゆばし

(D)

東里のマーシ〈男の名〉が

家里のマーシが

裕福な者であるから

金持ちの人であるから

五人の子供を生んで

七人の子供を生んで

夏の夜の間は

藁のタスキをしめて

セふゆぬゆーぬ なぎんな

ばらしぶぎ とういばし

(D')

(以下略)

冬の夜の間は

薬(の縄の)帯をしめて

第六節と第七節は、一節内に対句項が一つあり、その前に反復句が位置するので I-I-R₁、他は省略部分をふくめて、すべて一節内に対句項が二つあり、その前に反復句が位置するので II-I-R₁である。

③ I-I-R₃+II-I-R₅

若神ぬエーグ (アーグ 38)

一 うらでりつく (A)

若神 (A')

ワーラムツナウレ (囃子、以下略) (R)

ニきゆぬ日や いらまん (B)

うやき日や ただまん (B')

三 神迎い 日ありば (C)

しず迎い 日ありば (C')

(中略)

ウラデリックの

若神よ

今日の日は ほんとうに

富貴日は ほんとうに

神迎えの日であるから

威霊のお迎えの日であるから

九 前鞍ぬ かたんや

(D)

う太陽を びらし

前鞍の肩には

太陽を(型どった飾りを)つけ

二 すしふらぬ かたんや

(D')

う月型 びらし

月の型の(飾りを)つけ

二 右ふらぬ かたんや

(E)

ばべる型 とばし

蝶の型を飛ばし

三 左ふらぬ かたんや

(E')

あけず型 まわしよ

蜻蛉の型をまわし

(以下略)

第九一二節は、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので $I-I-R_2$ 、他は省略部
分をふくめて、すべて一節内に対句項が二つあり、その後に反復句が位置するので $II-I-R_2$ である。

④ $I-O-R_0+IV-O-R_0$

ゆりけーに (アーク 40)

一 八重山まーれ (A)

八重山生まれの

すむやまーれ (A')

下八重山生まれの

ゆりけーに (a')

ユリケーニへ女の名よ

二 ゆりけーに (B)

ちゅらびが (B')

生れや (b')

三 うるずんど (C)

若夏ど (C')

生りたりば (c)

(中略)

八 やえまんなか

あまりべーん

てーうめー

九 すむやなか

のこりべーん

てーうめー

一〇 あんしうめー

ばがきない

もとりば

(E)

(D')

(D)

ユリケーニの

美しい日の

生まれは

うりずん〈春〉に

若夏に

生まれたので

八重山では

(貫い手の) 余りさえ

いないのだろうか

下八重山では

(夫婦になる男の) 残りさえ

いないのだろうか

このような思い〈心配〉を

わたしの家族が

持っていたが

二 うしやかうめー

みがとどが

びいうりば

(E)

(以下略)

そのような思いを

メガ〈女〉の母が(して)

坐っていると

第八〇一一節は、一節内に対句項が一つあり、反復句がないので、I-O-R₀。他は一節内に対句項が三つあり、反復句がないので IV-O-R₀である。なお、第八・九節と第一〇・一一節とは、形式的にはIV型を志向しながらも(三語で句をなしている)、意味的にそれが許されず、結果的にI型のかたちをなしている。たとえば、

ハやえまんなか(A)

すむやなか(A')

—— (a')

九あまりべーん(B)

のこりべーん(B')

てーうめー(b')

などのように対句を組み替えればIV型になる。そのためには、——の部分に適当な語句を挿入しなければならぬ。それが省略されたためにIV型↓I型になったともいえる。このような例は、I型とIV

型の混合型にかなり多い。

⑤ I-1-R₃+IV-1-R₇

仲屋^{なかや}マーボーのアーグ（アーグ 31）

一 なかやーマーボー（A）

仲屋マーボー

とよんしゅーが（A'）

鳴響^{とよ}む主の

まぶなりやー（a'）

マブナリよ

よーい シャーがむやー よーい へ囃子、以下略（R）

二 まぶなりやが（B）

マブナリの

みやらびぬ（B'）

乙女の

なシふあや（b'）

産んだ子は

三 いチ なしん（C）

五人産んでも

むゆ なしん（C'）

七人産んでも

みどうんふあ（c'）

女の子（ばかり）

（中略）

一四 いチチがみゃー

五歳までには

みゃこんなない

（D）

宮古全体に

とうゆみた

一五 ななチがみゃー

うちなーんなない

ちゆくいた

(D')

評判になった

七歳までには

沖縄全体に

有名になった

(以下略)

第一四節と第一五節は、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので I-I-R₃、他は省略部分をふくめて、すべて一節内に対句項が三つあり、その後に反復句が位置するので IV-I-R₇ である。

⑥ II-0-R₀+IV-0-R₀

十日^{とう}四日^かの月^ちのよう^だに (アーグ 25)

一 とうかゆーかぬ チチだき (A)

じゅーぐにチぬ チチだき (A')

二 あがいかぎ (B)

ぬゆいちゅら (B')

しゅーがなシ (b')

三 あらきんぬ うやないや (C)

十日四日へ十四日への月のように

十五日の月のように

美しい上がり

きれいな昇り

主加那志

初めての親になるのは

はジみていぬ しゅーないや (C')

初めての主になるのは

四 みゃコッヴあぬ うやないーい (D)

宮古番所の親になれ

デやいざーぬ しゅーない (D')

出会い座へ一番座の主になれ

(中略)

セシまう いらび (E)

島を選び

むらう かきる (E')

村を選び

ちゃまいば (e')

なされては

(以下略)

第一・三・四節は、一節内に対句項が二つあり、反復句がないので $H-O-R_0$ 、第二・七節は、一節内に対句項が三つあり、反復句がないので $IV-O-R_0$ である。

⑦ $II-1-R_5+IV-1-R_7$

土原豊見親んたばるとうゆみやあのニル (ニーリ10)

一 んたばるぬ (A)

土原の

ふんぬにーん (A')

国へ部落の根に

とうゆたる (a')

鳴響んでいる

しゅらどう ゆふましやれへ囃子、以下略 (R)

二 ひやにシぬ(B)

うぶとうゆめ(B')

なから(b')

三 ふらとうゆめ(C)

ゆかるふあば(C')

まりまい(c')

四 ゆかるふあば んまり(D)

ういでいふあば んまり(D')

五 きゅー うぶなか わーりまい(E)

あた ちかい わーりまい(E')

六 ゆくばなシ さまだな(F)

びちばなシ さまだな(F')

(以下略)

ヒヤニシ〈人名〉の

大豊見親の

中から

子豊見親の

吉かる子が

お生まれになり

吉かる子が生まれ

親勝り子が生まれ

今日 うぶなかにおいでになっても

ちょっとの使いでおいでになっても

他の話をなさらないで

別の話をなさらないで

第四・五・六節は、一節内に対句項が二つあり、その後に反復句が位置するので H_1-R_5 、第一・二・三節は、一節内に対句項が三つあり、その後に反復句が位置するので IV_1-R_7 である。

⑧ $I-O-R_0 + II-O-R_0 + IV-O-R_0$

姉^{あに}ガマの家^{がや}（クイチャー 37）

一 ゆなくみやぬ

ばがかなシ

（A）

あにがま

二 いシはていぬ

いんがなシ

（A'）

チむシミヤ

三 あにがまやーや

ゆかつルがふあー

（B）

やいば

四 みやるびや

シまうやぬっふあや

（B'）

やりば

五 シとうむていん

うきー（C）

あきちやるん

うき（C'）

てい（c）

ヨナクミヤ（屋号）の

わたしの愛^{かな}し

姉さん

磯果ての

縁深き

肝染めし人よ

乙女は

富貴な人の子

であるから

乙女は

島親（部落の頭）の子

であるから

早朝に起き

明け方に起き

て

六なら みやイ みやり (D)

うんざぐや みやら (D')

まい (d')

七んみやいでいシてい (E)

んきやぎシてい (E')

あとうんな (e')

八みじゆ むていくー (F)

さし とりやり (F')

やらび (f')

(中略)

一四ならひチぬ なから (G)

さしゆるしゃが なから (G')

一五ならチンないだひー (H)

しるちゃオや いだひー (H')

(以下略)

自分の御飯を召し上がり

御神酒を召し上が

られて

もう召し上がられて

召し上がられて

後には

水を持って来い

柄杓をとりなさい

童

自分の櫃の中から

鍵つきの箱の中から

自分の着物を出して

白帳へ白衣を出して

第一〜四節は、一節内に対句項が一つあり、反復句がないので I-O-R₀ (IV↓I)、第五〜八節は、一

節内に対句項が三つあり、反復句がないので $IV-0-R_0$ 、第一四・一五節は、一節内に対句項が二つあり、反復句がないので $II-0-R_0$ である。

特殊反復型

単一型や混合型が、各節とも同一の反復句を単純に繰り返すのに対し、反復句に変化を加え、多様性を与えたのが特殊反復型である。反復句の多様化の方法には、①任意の節の間に別の反復句を挿入する、②対句の末尾句を反復する、③対句をうけてその内容を展開する、などがある。

①別の反復句を挿入する型。

ピヤーシの威部間声(ピヤーシ 9 ③)

一にだでいぬシ なやぎょーい (A)

根立て主を崇べよう

むとうい ソいなオれー 〈囃子、以下略〉(R¹)

やぐみかん なやぎょーい (A')

恐れ多い神を崇べよう

むとうい ソいなオれー 〈囃子、以下略〉(R²)

うやぎーゆーなオりやが 〈囃子。以下、三・

ゆーなオりやが 五・七・九・一一・

うやぎーゆーなオりやが 一四・一六・一九節
の後に入る〉

ゆーまざりやが

二 トコロぬシ なやぎょー (B)

ふだみかん なやぎょい (B')

三 いびまかん なやぎょい (C)

ピキまかん なやぎょい (C')

四 んまぬかん なやぎょーい (D)

やぐみかん なやぎょーい (D')

五 うふゆぬシ なやぎょーい (E)

ていだゆぬシ なやぎょーい (E')

六 うばらジオ なやぎょーい (F)

かみyarイオ なやぎょーい (F')

七 うぶやしゅーゆ なやぎょーい (G)

あかんぬシ なやぎょーい (G')

八 あまテラシ なやぎょーい (H)

あオみかみ なやぎょーい (H')

九 いかオふや なやぎょーい (I)

所の主を崇べよう

踏鎮めふだみの神を崇べよう

威部間の神を崇べよう

区域の神を崇べよう

母の神を崇べよう

恐れ多い神を崇べよう

大世主を崇べよう

太陽世主てだゆを崇べよう

ウパラジを崇べよう

カミヤラジを崇べよう

大家主を崇べよう

飽かんへ立派な主を崇べよう

天照らすを崇べよう

大御神を崇べよう

イカ大家を崇べよう

- かにやふや なやぎょーい (I')
 一〇 まいまだま なやぎょーい (J)
 まいびシキ なやぎょーい (J')
 二 ぶかまだーら なやぎょーい (K)
 ぶかままチ なやぎょーい (K')
 三 うやんまオ なやぎょーい (L)
 ぶなみがオ なやぎょーい (L')
 三 まとうがしゅーゆ なやぎょーい (M)
 いシぬぬシ なやぎょーい (M')
 四 ましらびゆ なやぎょーい (注) (N)
 五 くばらばジ なやぎょーい (O)
 しまぬぬシ なやぎょーい (O')
 六 ゆまさイウ なやぎょーい (P)
 ういかぬシ なやぎょーい (P')
 七 うふゆだみ うふざら (Q)
 ていだゆだみ とうゆチきや (Q')

- カニヤ大家を崇べよう
 前真玉を崇べよう
 前美底を崇べよう
 外間ダーラを崇べよう
 外間マツを崇べよう
 親阿母を崇べよう
 女メガを崇べよう
 漁が主へ漁の神へを崇べよう
 磯の主を崇べよう
 マシラビを崇べよう
 クバラバギへ弥勒神へを崇べよう
 島の主を崇べよう
 世勝りを崇べよう
 上の主を崇べよう
 大世鎮めの大皿は
 太陽世鎮めの鳴響ツキヤーへ大皿の名へは

一へにかいかぎ うふざら (R)

うさぎかぎ うふざら (R')

一ふていんやがみ とうゆたん (S)

なかビがみ とうゆたん (S')

立派な願いの太皿は

美しいお捧げの大皿は

天上までも鳴響んだ

天の中辺までも鳴響んだ

(注) 第一四節は対句脱落か？

右の歌謡の基本部分は、一節内に対句項が二つあり、第二対句項A'の前と後に反復句が位置するので R-S-R' である。その第一・三・五・七・九・一一・一四・一六・一九節の後に、あらたな反復句を挿入して反復のありかたをゆたかにしている。この反復句は、任意の節の末尾に何回か挿入されるばあいが多いが、ときには一首の末尾に添えられるだけのばあいもある。たとえば、「粟穂祭りの女びやーし」(ピヤーシ15) など。

②対句の末尾句を反復する型。

なり山アヤグ (アーク 86)

一サー (R¹)

なりやまや

なりていぬなりやま

(A)

海山は

慣れての海山

すうみやまや

すうみでいぬそみやま

(A')

いらよまん さーやぬ

すうみていぬ すうみやま

(R²)

二
サー (R¹)

なりやま んみやいてい

なりぶりさまいな しゅう

(B)

すうみやま んみやいてい

すうみぶりさまいな じゅう

(B')

いらゆまん さーやぬ

そみぶりさまいな しゅう

(R³)

三
サー (R¹)

ぬーまん ぬーらば

たずなゆゆるシな しゅう

(C)

みやらびやーいき

くくるゆるシな しゅう

(C')

スウミ山は

染めてのスウミ山

海山に行かれて

海にほれこむな 主

スウミ山に行かれて

山におぼれてしまうな 主

馬に乗らば

手綱を許すな 主

女の家に行き

心をゆるすな 主

いらゆまん さーやぬ
くくるゆるシな しゅう
(R⁴)

四
サー(R¹)

ぬーまぬ かぎさや
しるさどう かぎさ
みやらび かぎさや
いるどう かぎさ
(D') (D)

いらゆまん さーやぬ
いるどう かぎさ
(R⁵)

五
サー(R¹)

ぶりゆし なむや
あまいどう ゆしー
ばんぶなりや
あまいどう んかい
いらゆまん さーやぬ
あまいどう んかい
(E) (E) (R⁶)

馬の美しさは
白さぞ美しい
女の美しさは
色ぞ美しい

群れ寄せる波は
笑いてぞ寄せる
わが妻は
笑いてぞ迎える

単一型「H—R」を基本にして、第二対句項の末尾部（傍線で指示した箇所）を他の反復句に添えて反復する。対句項の歌詞は、各節とも異なるので、反復句は節の数だけ種類があることになる。

③ 対句をうけてその内容を展開する型。

やーぬんまのニイリ（ニ—リ17）

(イ) フダヤーの歌詞

一大節ぬ 年ざかい わーちやりやよ

あばすでる 羽生ゆる しゃくど思う

あんしかんし

あばすでる 羽生ゆる しゃくど思う

二家ぬ妻が するがかん 着てかよう

じゃばんばに なりうんむよ

あんしかんし

じゃばんばに なりうちからー

家の夫や ぷからすかんむ

三家ぬ夫が 白さなぎ 着てかよう

(R²)

大節〈節祭〉が 年境〈新年〉が 来たから
わたしは髀でて 〈若返って〉 羽が生える ように
思う

ああしてこうして

わたしは髀でて 羽が生える ように思う

家の妻が 白下裳を 着てからは

美しい羽に なっているよ

ああしてこうして

美しい羽に なっていてからは

家の夫は 飲らしからうよ

家の夫が 白禪を 着てからは

どうまきかぎ なりうんむよ

あんしかんし

どうまきかぎ なりうちから

家ぬ妻や ぶからすかんむ

(R³)

四 家の妻が 白しゆでな 着てからよう

あでんぬい なりうむんよ

あんしかんし

あでんぬい なりうちから

家の夫や ぶからすかんむ

(R⁴)

五 家ぬ夫が 白どぎん 着てかよう

どにかーぎ なりうんむよ

あんしかんし

どにかーぎ なりうちから

家ぬ妻や ぶからすかんむ

(R⁵)

六 家の妻が みましゃぎん 着てからよう

美しい胴巻き姿に なっているよ

ああしてこうして

みごとな胴巻き姿に なっていてからは

家の妻は 飲らしかるうよ

家の妻が 白袖の襦袢を 着てからは

いよいよ美しく なっているよ

ああしてこうして

いよいよ美しく なっていてからは

家の夫は 飲らしかるうよ

家の夫が 白胴衣を 着てからは

美しい胴衣姿に なっているよ

ああしてこうして

みごとな胴衣姿に なっていてからは

家の妻は 飲らしかるうよ

家の妻が ミマシャ着物へ新しく美しい着物へを着

てからは

ゆあらかーぎ なりうんむよ

あんしかんし

ゆあらかーぎ なりうちからー

家の夫や ぶからすかんむ

(R⁶)

七家ぬ夫が くるちよい 着てからよう

うふしゃばい なりうんむよう

あんしかんし

うふしゃばい なりうちから

家の妻や ぶからすかんむ

(R⁷)

八家の妻が まがら玉 ばきたかー

くんにかーぎ なりうんむよう

あんしかんし

くんにかーぎ なりうちから

家の夫や ぶからすかんむ

(R⁸)

九家の夫が はかた帯 はきたかー

まいぬすび なりうんむよう

腰回りが美しく なっているよ

ああしてこうして

腰回りが美しく なっていてからは

家の夫は 飲らしかろうよ

家の夫が 黒朝衣を 着てからは

大きさ栄えへ貫禄栄えに なっているよ

ああしてこうして

大きさ栄えに なっていてからは

家の妻は 飲らしかろうよ

家の妻が 曲玉を 首に佩くと

小胸が美しく なっているよ

ああしてこうして

小胸が美しく なっていてからは

家の夫は 飲らしかろうよ

家の夫が 博多帯を 巻き締めると

前結びへ身分の高い人の結び方へに なっているよ

あんしかんし

まいぬすび なりうちから

家の妻や ぶからすかんむ

(R⁹)

二 家ぬ妻が 亀甲かみんぎば しゃすてかー

つかしゃばい なりうんむよう

あんしかんし

つかしゃばい なりうちから

家ぬ夫や ぶからすかんむ

(R¹⁰)

二 家ぬ夫が くるむしゃず かぶてかー

黄八卷きうばつまき なりうんむよう

あんしかんし

なりうちから

家の妻や ぶからすかんむ

(R¹¹)

三五声ごうど 七くいと 神がうえー

神がうえーぬ しずがうえぬ かぎしゃよ

あんしかんし

ああしてこうして

前結びに なっていてからは

家の妻は 飲らしからうよ

家の妻が 亀甲簪を 差してからは

司栄えへ神女のように美しく になっているよ

ああしてこうして

司栄えに なっていてからは

家の夫は 飲らしからうよ

家の夫が 黒手拭を 被ってからは

黄八卷をしているように なっているよ

ああしてこうして

なっていてからは

家の妻は 飲らしからうよ

五声を 七声を 神の上に

神の上の 威霊しずへ神の 上の 美しさよ

ああしてこうして

神がうえぬ

しずがうえぬ

かぎ

(R¹²)

神の上の

威霊の上の

美しさよ

しゃよ

第一節と第二節は、一節内に二対句があるV型で、その第二対句を繰り返すことによって反復句を形成している点で前例②と類似している。第二―一節の対句は、妻あるいは夫の種々の美しい装いを讃え、反復句は、その結果に対する夫あるいは妻の喜ばしい心情を表現する。対句の内容をうけて、反復句はその意味をあらたに広げる役割をはたす。反復句の内容は各節とも異なるが、全体に同格的構造を共有している。対句の内容をうけるので、節の数だけ異なった種類の反復句がある。

接合型

単一型・混合型・特殊反復型の二首ないしは三首が、前後に整然と接合した型を接合型という。一首を形成する各節の構造が、非等質的な点は、混合型や特殊反復型と共通する。非等質性が、混合型では対句に、特殊反復型では主として反復句に変化が生じる。それに対して、対句・反復句両方の変化が生じ、しかも、前後に整然と接合している点に、接合型の特徴がある。

構成要素となる単一型・混合型・特殊反復型の和で、この型の種類を示すことにする。

① I-0-R₀+I-1-R₃

マージミガ(タービ19)

- 一 ばんぬ まーじみがよ (A)
 二 ばんぬ かんぬさー (A')
 三 ふらがんどう やりば (B)
 四 またがんどう やりば (B')
 五 んまぬかん みゅーぶぎ (C)
 六 やぐみかん みゅーぶぎ (C')
 七 ゆらさまイ みゅーぶぎ (D)
 八 ぶがさまイ みゅーぶぎ (D')
 九 ばが にふチ オこい (E)
 一〇 かんむだま まこい (E')

(中略)

へここからうたう調子が変わる

- 一 ぶにがまん ぬーり (A)
 やーきやー へ囉子、以下略 (R)
 二 みのがまん ぬーり (A')
 三 うぶぶーや ピキんてい (B)

わたしのマージミガ〈神女名〉よ

わたしの神の誘い子は

子供の神であるから

子孫の神であるから

母の神のお蔭で

恐れ多い神のお蔭で

許されるお蔭で

満たされるお蔭で

わが根口のお声で

神の真玉の真声で

小舟に乗り

小舟に乗り

大帆は引き満ちて

一 たかぶや ピキんてい (B')
 二 やーら びらシ んめい (C)
 三 なご びらシ んめい (C')
 四 ばんぬ まージみが (D)
 五 ばんぬ かんぬさー (D')
 六 うりやみん ぴだから (E)
 七 ぬーりやみん ばまから (E')

(以下略)

高帆は引き満ちて
 柔らかに走らして参られ
 和やかに走らして参られ
 わたしのマージミガ
 わたしの神の誘い子
 下りたことのない浜から
 乗ったことのない浜から

このタービは、一二九節からなり、前半第五七節までは一節内に対句項が一つあり、反復句がないので I-O-R₀、後半第五八節以下は、対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので I-I-R₃である。I-O-R₀と I-I-R₃の接合型。

② I-I-R₃+I-I-R₃

八重山^{ヤーマ}ウシメガのタービ (タービ7)

一 ばんぬ うシみが (A)
 やーよいぞーい へ囃子、以下略 (R)
 二 ばんぬ ぶなざら (A')

わがウシメガは
 わが女按司は

- 三 ふらがんど う やりば (B)
 四 またがんど う やりば (B')
 五 んまぬかん みゆぶぎ (C)
 六 やぐみかん みゆぶぎ (C')
 七 ゆらさまイ みゆぶぎ (D)
 八 ぶがさまイ みゆぶぎ (D')
 九 ばが にふチ オこい (E)
 一〇 かんむだま まこい (E')
 一一 オトモよん とうゆま (F)
 一二 オチきゆん みゃーがら (F')
 一三 ばんぬ うシミが (A)
 よーやーきやーへ囃子、以下略 (R)
 一四 ばんぬ ぶなざら (A')
 一五 いっちゅ あらけんな (B)
 一六 いっちゅ ばずみんな (B')
 一七 ばが やいまいん (C)

子供の神であるから
 子孫の神であるから
 母の神のお蔭で
 恐れ多い神のお蔭で
 許されるお蔭で
 満たされるお蔭で
 わが根口のお声で
 神の真玉の真声で
 お供も鳴響もう
 お付きも名を揚げよう
 わがウシメガは
 わが女按司は
 一番新しくは
 一番初めには
 わが八重山で

一ハシむやいまういん(C')

下八重山で

一九やばだりうイ かんむ(D)

穏やかな神は

二〇みやコしゅーうイ かんモ(D')

宮古主である神は

(以下略)

前半第一二節までは、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので「I-I-R₃」、後半第一三節から最終第一三四節までもおなじく「I-I-R₃」である。歌形的には両者ともおなじであるが、反復句が異なるので、同一歌形の接合型。

③ I-I-R₃+I-2-R_{1,3}

西の家元にしにやむとのフサ(フサ15)

一やふあだりる むむかん(A)

柔々とした百神

はらり はらりへ囃子、以下略(R)

二なゴだりる ゆノさ(A')

和々とした世直さ

三ていんだうぬ みゅーぶぎ(B)

天道のお蔭で

四やぐみゅーいぬ みゅーぶぎ(B')

恐れ多い神のお蔭で

五にだりぬシ みゅーぶぎ(C)

根立て主のお蔭で

六やぐみかん みゅーぶぎ(C')

恐れ多い神のお蔭で

セ ゆーむとうぬ かんみょー (D)

ベ ゆーにびぬ かんみょー (D')

九 うシばぬシ みゅーぶぎ (E)

一〇 まきやんぬシ みゅーぶぎ (E')

(中略)

〈調子が速くなる〉

七 おーへ囃子、以下略 (R¹)

うシなうし んみゃい (A)

やーやきやーへ囃子、以下略 (R²)

六 ぬイなぬーり んめじが (A')

五 うぶぎー うふぁロジが (B)

四 いすぎー かみゃロジが (B')

三 ならでいよーさまい (C)

二 かんでいよーさまい (C')

一 三 まぬかまイ みゅーぶぎ (D)

四 ゆるばまい みゅーぶぎ (D')

四元の神よ

四威部の神よ

ウシバ主のお蔭で

マキャン主のお蔭で

押しに押し参られて

乗りに乗って参られて

大座のウパラジ〈神名〉が

磯座のカミヤラジが

自分手をなされて (迎えられて)

神手をなされて (迎えられて)

招きに応ずるお蔭で

寄り合われるお蔭で

益 うれい むむシかんま (E)

これ百十神は

六 うれい とうじらんま (E')

これ手摺る神は

(以下略)

前半第七六節までは、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので $I-I-R_3$ 、後半第七七節から最終第一九二節までは、一節内に対句項が一つあり、その前と後に反復句が位置するので $I-2=R_{1,3}$ である。

④ $I-I-R_3+II-I-R_1$

大城殿のタービ (タービ 8)

一 うふぐふとうぬよ (A)

大城殿よ

こいのたんいしやー かゝまたぬ

シまぬんみぼーかー

〔略〕 (R)

二 やふだみぬ まぬシ (A')

家踏鎮めの真主は

三 ふらがんどう やりば (B)

子供の神であるから

四 またがんど やりば (B')

子孫の神であるから

五 んまぬかん みゆぶぎ (C)

母の神のお蔭で

六 やぐみかん みゆぶぎ (C')

恐れ多い神のお蔭で

セ ゆらさまイ みゆふぎ (D)
ハ ふがさまイ みゆふぎ (D')

許されるお蔭で
満たされるお蔭で

(中略)

二四 ふーしー ふーしー 〈囃子、以下略〉 (R)

うふぐふとうのよー (A)

大城殿よ

やふだみの まぬシ (A')

家踏鎮めの真主は

二五 ふらがんどう やりば (B)

子供の神であるから

またがんどう やりば (B')

子孫の神であるから

二六 んまぬかん みゆふぎ (C)

母の神のお蔭で

やぐみかん みゆふぎ (C')

恐れ多い神のお蔭で

二七 ゆらさまイ みゆふぎ (D)

許されるお蔭で

ぶがさまイ みゆふぎ (D')

満たされるお蔭で

二八 ばー にーふチ オこい (E)

わが根口のお声で

かんむだま まこい (E')

神の真玉の真声で

(以下略)

前半第一三節までは、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので R₁-R₂、後半第

一四節から最終第二一節までは、一節内に対句項が二つあり、それらの前に反復句が位置するので $\Pi-1-R_1$ である。

⑤ $\Pi-1-R_3 + \Pi-1-R_5$

マギチミガ(タービ28)

一まぎチミが わんな(A)

やーきーやーきーへ囃子、以下略(R)

二んまりかん わんな(A')

三きゅーびゅーい ういや(B)

四きゅーなオイ ういや(B')

五んまぬかん みゆぶぎ(C)

六やぐみかん みゆぶぎ(C')

七ゆらさまい みゆぶぎ(D)

八ぶがさまい みゆぶぎ(D')

九うとうむゆん とうゆま(E)

一〇うちきゆん みゃーがら(E')

(中略)

マギチミガ(神女名)であるわたしは

生まれた神であるわたしは

今日の日取りの上は

今日の直る日の上は

母の神のお蔭で

恐れ多い神のお蔭で

許されるお蔭で

満たされるお蔭で

(神の) お供も鳴響もう

(神の) お付きも名を揚げよう

へタリ声にかわる

奎 あっしゅーつつあー やていがらー(A)

足四つだから

ピ さゆーつつあー やていがらー(A')

足四つだから

ふーしー ふーしーへ囃子、以下略(R)

突 ヲ あー うどうぬ どうぬば(B)

あなたのお殿 殿を

かん うどうぬ どうぬば(B')

神のお殿 殿を

宅 まいぬかーが ういぬ(C)

前の井へ井戸名の上の

んかイがーが ういぬ(C')

向かい井へ井戸名の上の

六 ヲ あーらぬ かたん(D)

東の方角に

に ヲ あーらぬ かたん(D')

屋敷の東の方角に

充 にまーらし とぅりゆり(E)

根廻わしをとって

チまーらし とぅりゆり(E')

準備をして

(以下略)

前半第六四節までは、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので I-I-R₃、後半第六五節から最終第七三節までは、対句項が二つあり、それらの後に反復句が位置するので II-I-R₃である。

⑥ II-O-R₀+IV-O-R₀

継母^{まゝ}のフサ(フサ6)

一 かんま まぎとーりる (A)

かんま シまとーりる (A')

二 にシまから うりんな (B)

しらジから うりんな (B')

三 ばんが ふさ うふかん (C)

かんぬ ふさ うふかん (C')

四 むむふさオ ふさソ (D)

やソふさオ ふさシ (D')

五 おシなオし オりていよー (E)

ぬーイなぬり おりていよー (E')

(中略)

一〇 んぎゃまーま (A)

からまーま (A')

かんまよー (a')

神は和やかに

神は隠やかに

根島から降りてくる時は

シラ地から降りてくる時は

わがフサを欲しい大神は

神のフサを欲しい大神は

百フサを欲しがっている

八十フサを欲しがっている

押しに押しして降りて

乗りに乗って降りて

苦い継母

辛い継母

神よ

二 んまぬイば (B)

かんぬシば (B')

いらびり (b')

三 ばが みゃーく (C)

シでいみゃーく (C')

シリばよー (c')

三 コトふーん (D)

コトしま (D')

みどうむやーよー (d')

四 かぬていてい (E)

とうかていてい (E')

かたらだ (e')

(以下略)

午の日を

神の日を

選んで

わが宮古

解で宮古

だから

他の国の

他の島の

女は

こうだへ結婚するゝとって

十日といって

語らなかった

前半第九節までは、一節内に対句項が二つあり、反復句がないので H-O-R₀、後半第一〇節から最終第二五節までは、一節内に対句項が三つあり、反復句がないので IV-O-R₀ である。

⑦ H-1-R₃+H-1-R₁

ティラの大按司おじがのタービタービ（タービ6）

一 ていらぬぷジとうゆみやよ（A）

ういなっヴあまノシよー（A'）

コンドなぎ とよまへ囃子、以下略（R）

二 ふらがんどう やりば（B）

またがんどう やりば（B'）

三 んまぬかん みゆぶぎよー（C）

やぐみかん みゆぶぎよー（C'）

四 ゆらさまイ みゆぶぎよー（D）

ぶがさまイ みゆぶぎよー（D'）

五 ばが にふチ オコいよ（E）

かんむだま まコいよ（E'）

（中略）

ハ ふーしー ふーしーへ囃子、以下略（R）

てらのうぶジとうゆみやよー（A）

ういなっヴあまのシよー（A'）

ティラの大按司とよ鳴響み親は
上へ神の子の真主よ

子供の神であるから

子孫の神であるから

母の神のお蔭で

恐れ多い神のお蔭で

許されるお蔭で

満たされるお蔭で

わが根口のお声で

神の真玉の真声で

ティラの大按司鳴響み親よ
上の子の真主よ

九 びきりやがんやりば (B)

男神であるから

さむりやがんやりば (B')

土神であるから

一〇 んまぬかんとぅゆみょー (C)

母の神鳴響み親は

やぐみ うふかんむ (C')

恐れ多い大神は

二 あていぬ やぐみさん (D)

あまりに恐れ多い

どうきぬ うばでいさん (D')

とても恐れ多い

三 ふゆぬ みちきや (E)

冬の三カ月は

しらジ みーちきや (E')

冬の三カ月は

(以下略)

前半第七節までは、一節内に対句項が二つあり、それらの後に反復句が位置するので $\Pi-1-R_5$ 、後半第八節から最終第三六節までは、一節内に対句項が二つあり、それらの前に反復句が位置するので $\Pi-1-R_1$ である。

⑧ $IV-0-R_0 + I-1-R_1$

仲嶺元^{なみむとう}の世乞^{ゆぐ}いピヤーシ (ピヤーシ5)

一 ていんだうぬ (A)

天道の

やぐみゅーいぬ (A')

恐れ多い神の

みゆぶぎ(a')

二にだでいぬシ(B)

やぐみかん(B')

とうゆみやよ(b')

三ヨボむとうぬ(C)

ヨボにびぬ(C')

うふかん(c')

四かんま やば(D)

ぬっしぎ ぶゆ(D')

たりるよ(d')

五このところ(E)

このふだみ(E')

びゆりイ(e')

(中略)

へここから謡う調子が変わる

一六 あしらーへ囃子、以下略(R)

お蔭で

根立て主

恐れ多い神

鳴響み親よ

四元の

四威部の

大神

神は穏(やかに)

主は静

かに

この所(屋敷)に

この踏鎮め(区域)に

坐します

このいびま びゆりイ (A)

この威部間に坐します

一七 このピキま びゆりイ (A')

この区域に坐します

一八 いびま うぶかんま (B)

威部間の大神は

一九 ピキま うぶかんま (B')

区域の大神は

二〇 かんま うふからまい (C)

神は偉大であられるから

二一 シつあ うふからまい (C')

主は偉大であられるから

二三 なーピかり かんま (D)

光り輝くあなたの神は

二三 うらピかり かんま (D')

照り輝くあなたの神は

二四 きゅーびゆイ ういや (E)

今日の日取りの上は

二五 きゅーなオイ ういや (E')

今日の直る日の上は

(以下略)

前半第一五節までは、一節内に対句項が三つあり、反復句がないので IV-0-R₀、後半第一六節から最終第三〇四節までは、一節内に対句項が一つあり、その前に反復句が位置するので I-I-R₁である。

⑨ I-1-R₃+I-2-R_{1.3}+I-2-R_{1.3}

前の家元まいにやーむとうのフサ (フサ16)

一やばたりる むむかん (A)

柔々とした百神

はーらい はーらいへ囃子、以下略(R)

二 なごたりる ゆなオさ(A')

三 にだでいぬシ みゆふぎ(B)

四 やぐみかん みゆふぎ(B')

五 ゆーむとうぬ かんみょー(C)

六 ゆーにびぬ かんみょー(C')

七 うシばぬシ みゆぶぎ(D)

八 まきやんぬシ みゆぶぎ(D')

九 まんざぬシ わんな(E)

一〇 まきやど だキ わんな(E')

(中略)

へナービ声に変わる

七 あーへ囃子、以下略(R¹)

うシなうし んめい(A)

いやーきやーへ囃子、以下略(R²)

和々とした世直さ

根立て主のお蔭で

恐れ多い神のお蔭で

四元むとうの神よ

四威部いべの神よ

ウシバ主のお蔭で

マキャン主のお蔭で

万座主へ神名。山のフシラズのことへのわたしは

マキャ殿へ神名。山のフシラズのことへを抱くわたしは

しは

押しに押し参られて

三ぬイなぬり んめい(A')

三うふざ うぱらジが(B)

三いシざ かみやらジが(B')

三ならびよー さまい(C)

三かんでいヨー さまい(C')

三まぬかまい みゆぶぎ(D)

三ゆらばまい みゆぶぎ(D')

三うり むむシかんま(E)

三うり とうジらんま(E')

(中略)

へヤーキヤー声に変わる

二〇あーへ囃子、以下略(R¹)

うシなうし んめい(A)

やーきヤーへ囃子、以下略(R²)

二〇ぬイなぬり んめい(A')

二二いだシかん やりば(B)

乗りに乗り参られて

大座ウパラジへ大主が

磯座カミヤラジへ神主が

自分手をなされてへ迎えられて

神手をなされてへ迎えられて

招きに応ずるお蔭で

寄り合われるお蔭で

これ百十神は

これ手摺る神は

押しに押し参られて

乗りに乗って参られて

出す神へ祭式名であるので

二三 びゅーぎかん やりば (B')

神座の神であるので

二三 オーやまが ういん (C)

聖なる山の上に

二四 ふるやまが ういん (C')

古山の上に

二五 むむむイが ういん (D)

百杜の上に

二六 むむたきが ういん (D')

百嶽の上に

二七 ビが いチか なイぎゃー (E)

日が五日になるまで

二八 ゆーがぶ んていきゃー (E')

世果報の満つまで

(以下略)

前半第七〇節までは、一節内に対句項が一つあり、その後に反復句が位置するので I-I-R₃、中間第七一節から第一〇八節までは、一節内に対句項が一つあり、その前と後に反復句が位置するので I-2-R_{1.3}、後半第一〇九節から最終第一八〇節までは、一節内に対句項が一つあり、その前と後に反復句が位置するので I-2-R_{1.3} である。中間と後半とは歌形的にはおなじだが、反復句が異なるので、同一歌形の接合型である。

㊤ II-0-R₀+II-1-R₃+II-2-R_{3.5}

河良原かろうばるのフサ (フサ4)

一 かんま まきとうりる (A)

神は和やかに

かんま シまとうりる (A')

二にシまから うりんな (B)

しらジから うりんな (B')

三ばんがふさ ふさん (C)

かんぬふさ うふかん (C')

四むむふさオ ふさシ (D)

やソふさオ ふさシ (D')

五おシなおし オりていよー (E)

ぬーイなぬーり オりていてよー (E')

(中略)

へここから歌の旋律が変わる

三あうギミジ とうりゃい (A)

いノイミジ とうりゃい (A')

うやきやーへ囃子、以下略 (R)

四とうイ むとうんがみどう (B)

うまい とうんがみどう (B')

神は隠やかに

根島から降りて来る時には

シラ地から降りて来る時には

わがフサを欲しい

神のフサを大神は

百フサを欲しがっている

八十フサを欲しがっている

押しに押して降りて

乗りに乗って降りて

清水を汲み取って

祈りの水を汲み取って

(水を) とった元までも

御前元までも

三 なら うちやイ まさり (C)

かん むちやイ まさり (C')

三 つッあー うぶゆどうんむ (D)

かん うぶゆどうんむ (D')

三 ういうい とりやい (E)

ばチばチ とりやい (E')

(中略)

へここからメロディーが変わるへ

三 あっつあだーチから (A)

うやきやーへ囃子、以下略 (R¹)

しゃーらだーチから (A')

うやきやーへ囃子、以下略 (R²)

三 つさすとうが ぱなり (B)

まいすとうが ぱなり (B')

三 いシばなん めゆり (C)

ゆにむイン めゆり (C')

(初水を) 捧げた自分が勝り

(初水を) 持った神が勝り

あなたの大世殿は

神の大世殿は

上々(の水)を取って

初々(の水)を汲み取って

アツツアダチの舟着場から

シャーラダチの舟着場から

白い海の外の離れの

前海の外の離れの

(瀬戸崎の) 磯端に登って

砂岡(砂岡)に登って

六 いシ むゆんとうくる (D)

磯の見える所に

なな むゆんとうくる (D')

ナナの見える所に

七 まいばなどう ばだり (E)

前端へ地名へに渡り

チみやぎぬい ばだり (E')

積み上げ乗りへ地名へに渡り

(以下略)

前半第二二節までは、一節内に対句項が二つあり、反復句がないので $\Pi-0-R_0$ 、中間第二三節から第六二節までは、一節内に対句項が二つあり、それらの後に反復句が位置するので $\Pi-1-R_3$ 、後半第六三節から最終第八四節までは、対句項が二つあり、第二対句項 A' の前と後に反復句が位置するので $\Pi-2-R_{3.5}$ である。

㊦ IV-1- R_7 +I-1- R_1 +特殊反復型

夏穂^{ぎい}祭りのびゃーしぐい (ピャーシ 20)

一 いーびーばーなーゆ (A)

威^い部^び端を

たーきーばーなーゆ (A')

嶽端を

あきさーまーえー (a')

明けなされよ

ゆまさーりやが

〈囃子、以下略〉(R)

ゆなおーりやが

二 やーシーキーのシ (B)

とーこーろーのーシ (B')

なーやーぎょーえー (b')

三 にーのーてーどーシ (C)

きよのーぴょーい (C')

くがにーぴょーい (c')

四 なーんーかーぼーい (D)

やーおーかーぼーい (D')

ちとみーさまえ (d')

五 なーんーかーまーシ (E)

やーおーかーまーシ (E')

おーさーぎょーえー (e')

(中略)

へここより調子が変わるへ

二 まじらーへ囃子、以下略 (R)

屋敷主の

所主の

名を揚げようへ崇へようへ

子の年

今日の日取り

黄金日取り

七日日取り

八日日取りを

勤めなされて

七日にわたって

八日にわたって

捧げよう

ないかにしゅーが
むむちよーゆー

成り金主の
百長〈神〉を

二 とうびとういしゅーや
まるみさーまい

飛鳥主を
認めなされて

三 やむとうーがーに
なやぎーでいー

大和神を
名を揚げよう

四 にほんがーに
なやぎーでいー

日本神を
名を揚げよう

五 りゅーぐーてーん
なやぎーでいー

竜宮天を
名を揚げよう

六 まんちちよーゆ
なやぎーでいー

真道長〈航海安全の神〉を
名を揚げよう

(中略)

〈再び調子が変わる〉

二 いびぬかーん(A)
たきがのーし(A')

威部の神
嶽の主を

なやぎでいよー (a')

もーとーえー

そーいなおれー

〈囃子、以下略〉 (R¹)

二 シまのちよーゆ (B)

ゆしましゆーゆ (B')

なやぎでいよー (b')

三 いしぬかーん (C)

いんぬぼーゆ (C')

なやぎでいよー (c')

三 うぶゆーぬ (D)

かんがなシ (D')

なやぎでいよー (d')

四 みゆーでいーらー (E)

こやきがーゆ (E')

なやぎでいよー (e')

(中略)

名を揚げよう

島の長〈神〉を

四島主を

名を揚げよう

磯の神

海のボー〈神名〉を

名を揚げよう

大世の

神加那志

名を揚げよう

ユーイディラ〈嶽名〉の

叶えてくださる神を

名を揚げよう

𪛗とうふたぼー(F)

十二方

じゅーにぼーん(F')

十二方(の神)も

まるみさまいよー(f')

認めなされて

𪛗ゆーまさりやが

〈四九・五〇・五一は

𪛗ゆーなおーりやが

囃子〉(R²)

𪛗へーいや

前半第一〇節までは、一節内に対句項が三つあり、それらの後に反復句が位置するので IV-1-R₂、中間第一一節から第一九節までは、一節内に対句項が一つあり、その前に反復句が位置するので I-1-R₁、後半第二〇節以下は、IV-1-R₂の末尾にあらたな反復句が添えられているので特殊反復型である。

特殊型

対句法に属さないものを特殊型として、ひとまず一括しておく。

① 整然とした対句をもたないもの。

池間 マージメガ (アーク 17)

一 いきまじゃーんどう

池間島に

ぶーんみゃーぬ さとうん

んまりたい

うやき まージみが

ばなり うい

うやき まージみが

なうりへ囃子、以下略

二 かぎさ たうとうよー

ばがどうよー んまりーどう

まージみがよ なはいうたりゃー

かぎさよーい ばがすじゃよ

シたていばんどう やいすが

いらう いき あちやーくーでいてい

いきうシが みがすぎや

シたていばん あかいばんよー

いらう いき あちやーくーでい

にーかー くーでい いきうシが

布織村の里に

生まれた

富貴なマージメガ

離れ(島)にいる

富貴なマージメガ

美しく尊く

わたしが生まれて

マージメガが生まれていたから

立派なわが兄は

火立番であるが

伊良部に行き 明日は来ると言って

行ったが メガの兄は

火立番明かり番(であるが)

伊良部に行つて 明日は来ると

夜更けには来ると(いつて)行ったが

んぬはかでい うさやふき
なんがばな すゆがばな

とうばしーい

いらうからや ゆるいからや
くーらいぎさーにゃーんすー

三 ばがすじゃぬ

シたていばんぬばー

ばが ふでい

ばがすじゃぬ シたていばんな たるが
つヴあすじゃや シたていあぐ

いらまーん

四 にーぬやーぬ うちぬやーぬ ぬさ

ならちんな とういかきどう

ならかかんま とういかき

やまぐシぬ んちからどう

とうりんぱりー ふにだきどう

子の方角の風が激しく吹いて

波の花潮の花を

飛ばしているから

伊良部からは佐良浜からは

来られそうにもない

わが兄の

火立番は

(兄に代って) わたしがするが

わが兄の火立番は誰か

あなたの兄の火立番の友は

ほんとうに (誰かね)

根の家の奥の家のヌサ〈男名〉が

自分の着物をつけて

自分の下裳かかんをつけて

山越し〈仲間越し〉の道から

瀬れ晴れ舟のように

ゆるゆるとう　ぬかぬかとう

ふぐシぬ　ぐーんかい

まみぬばなじゅーや

やまあらい　んちうい

五　ならずでいや　からジだき　あぎ

かかんばな　いじゅチだき　からぎ

んまたじゅーゆば　なかしーかき

ふんじゅーゆば　なかしひ　びらかひ

ふんじゅぬ　くいたらー

ならずでい　みゃうばー

とうりかきてい

シたていんかい　ぬーいていが

むとうぬぶとうとう　いらまーん

ひだいジな　やらいだき

につヴいうい

六　うふふにゃー　いきまだチどう

ゆるゆると　ぬかぬかと

仲間越し〔地名〕の岩に

豆の花潮〔大潮〕は

山のように洗い満ちている

自分の着物を髪の高さまで上げて

下裳を乳房が出るまで繋げて

母たちの溝を陰部で掻きわけ

大溝を陰部で（波を）分け

大溝を越えたら

（まくりあげていた）自分の着物を

おろして

火立台に登ったら

前の夫とほんとうに

左綱のようにからみあつて

抱きあつて寝ている

大船は池間崎を

ひやりうい

ゆびがゆーぬ シたていばんな

たるがよ

シたていぬ かぎかいばや

走っている

夕べの夜の火立番は

誰かね

火立がきれいだったのね

部分的にいくつかの対句があるが、全体として整然とした対句をもたない特殊な型である。

②琉歌形式の影響によるもの。

遠見下のうかば木（クイチャー25）

一とうーみしたぬ うかばぎー

ゆーなオラシ うかばぎー

ゆーなオラシ ちぬがらどう

なーゆーかぎさ

遠見〈地名〉下のうかば木

世直らす〈五穀豊穰をもたらす〉木

世直らす〈五穀を稔らす〉木だから

そんなにきれいなのだ

そーにぬ よいさっさい

さーまたにぬ よいさっさい

〈囃子、以下略〉

二かいまたぬ しまや

だいんな みずらし しまやんど

うぶがんま くさでやーし

狩俣の島〈村〉は

ほんとうに昔からよい島である

大神島を腰当て〈背後〉にして

いらうわ まいなし

三 ばなほチン ぬーりうてい

ばいばらオ みやきりば

なかのボー みやらびたが

ていよぬ かぎさ

四 あがイざと みどうんまよー

あさイシンちゃ だらかどうシ

さーイぬやーゆ とうみていどう

ちびだか うシンばし

五 なかやー んまたが

みなかな あかんふにイぬ

なりうんど ぞーゆが ぞーゆ

にかがゆや うり むいだんかよ

六 ふーいでやーんどう ふあーってオイ

コぶしゅーゆでやーんどう ふあーっていオイ

うまぬやーぬ あにがまたが

伊良部島を前にして

端^{ばな}ムツへ地名に登って

南方を眺めると

中ごろで（踊っている）乙女たちの

手舞いがきれいだ

東里の女は

潮干狩りしないというのは嘘^{うそ}である

エビの家を捜して

尻を高くしてうつむいている

仲屋の母さん達の

庭には赤く熟れた密柑が

なっている さあ さあ

今夜はこれを盗みとる相談をしよう

そんな密柑を食おうとしているのか

そんな密柑を食おうとしているのか

その家の姉さん達が

うちとうり わーまばよー

セなかやーんまた ふチキんな

うぶむとうギシキぬ ういうんど

ういが なから

ぞーたむぬや

とうーふたたイ しーたんど

第二節と節三節は、琉歌形式の影響によって成立したと推測される。第二節は、

小浜てる島や 果報の島やれば

大嶽はこしあて 白浜前なち

と類型であり、また、第三節は、

恩納岳のぼて おし下り見れば

恩納松金が 手振りきよらさ

と類型である。琉歌の音数律八・八・八・六に厳密には適合せず、字余りのだが、おそらくは、琉歌形式の影響をうけて成立したであろう。このことは、各節の間に内容的不連続性があることにもうかがえる。叙事的な連続性が寸断され、各節が内容的に独立した関係をもっている。

鞭を取って追いかけたらどうするか

仲屋の母さん達の（庭の）上り石に

大きな根元のススキが生えている

その中から

良い薪を

十二束とりました

四 宮古歌謡の歌形の段階―むすびにかえて―

宮古歌謡の歌形を段階的に整理すると、つぎのようになる。

(1) 対句は、 A, A' 形式をもっとも基本とする。

(2) A, A' 形式の第一項 A の下半分が消失して、 A, A', a 形式が分化する。

(3) 旋律化(歌謡)の段階で、 A, A' 形式は単一型 I 型($A,$)・II 型($AA',$)・III 型($AA'BB',$)・VII 型($A,$)に分化する(ただし、宮古歌謡には VII 型の実例はない)。おなじく、 A, A', a 形式は IV 型($AA'a',$)・V 型($AA'a'BB'b',$)に分化する。さらに、 A, A' 形式と A, A', a 形式とが複合して VI 型($AA'BB'b',$)が分化する。

また、単一型 I Ⅶ 型に、反復句が添えられ、その数と占める位置によって、つぎのような型に分化する。

I 型

- ① I-0- R_0 ($A,$)
- ② I-1- R_1 ($RA,$)
- ③ I-1- R_3 ($AR,$)
- ④ I-2- $R_{1,3}$ ($RAR,$)

II 型

- ⑤ II-0-R₀ (AA',)
- ⑥ II-1-R₃ (ARA',)
- ⑦ II-1-R₅ (AA'R,)
- ⑧ II-2-R_{1,3} (RARA',)
- ⑨ II-2-R_{2,4} (A₁RA₂A₁'RA₂',)
- ⑩ II-2-R_{3,5} (ARA'R,)

III 型

- ⑪ III-0-R₀ (AA'BB',)
- ⑫ III-1-R₉ (AA'BB'R,)

IV 型

- ⑬ IV-0-R₀ (AA'a',)
- ⑭ IV-1-R₇ (AA'a'R,)

V 型

- ⑮ V-0-R₀ (AA'a'BB'b',)

VI 型

⑯VI-0-R₀ (AA'BB'b',)

(4) 単一型の対句が非等質化(節によって対句の型I~VIIが混合)して、混合型が分化する(混合型にはつぎのような種類がある)。

- ① I-0-R₀+II-0-R₀
- ② I-1-R₁+II-1-R₁
- ③ I-1-R₃+II-1-R₅
- ④ I-0-R₀+IV-0-R₀
- ⑤ I-1-R₃+IV-1-R₇
- ⑥ II-0-R₀+IV-0-R₀
- ⑦ II-1-R₅+IV-1-R₇
- ⑧ I-0-R₀+II-0-R₀+IV-0-R₀

(5) 単一型、混合型の反復句が多様化して、特殊反復型が分化する。特殊反復型には、①別の反復句を挿入する型、②対句の末尾句を反復する型、③対句をうけてその内容を展開する型、などがある。

(6) 単一型、混合型、特殊反復型の複数が接合して接合型が分化する(接合型にはつぎのような種類がある)。

- ① $I-0-R_0 + I-1-R_3$
- ② $I-1-R_3 + I-1-R_3$
- ③ $I-1-R_3 + I-2-R_{1.3}$
- ④ $I-1-R_3 + II-1-R_1$
- ⑤ $I-1-R_3 + II-1-R_5$
- ⑥ $II-0-R_0 + IV-0-R_0$
- ⑦ $II-1-R_5 + II-1-R_1$
- ⑧ $IV-0-R_0 + I-1-R_1$
- ⑨ $I-1-R_3 + I-2-R_{1.3} + I-2-R_{1.3}$
- ⑩ $II-0-R_0 + II-1-R_5 + II-2-R_{3.5}$
- ⑪ $IV-1-R_7 + I-1-R_1 + \text{特殊反復型}$

(7) 対句形式をこわすことによって特殊型が分化する。また、特殊型には、琉歌形式の影響によって成立するものもある。